

2020年度 藤森平司特別セミナー 「1年の振り返り」 2021.1.30

第205号 2021年2月1日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていくよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

藤森平司 特別セミナー

2021年1月30日に藤森平司 特別セミナーが
新宿せいが子ども園にて開催しました。

1月中旬に予定されていました、第55回保育環境セミナーが
緊急事態宣言を受け開催を中止することとなり、急きょ特別
セミナーとして開催することが決まりました。

当日は全国から約120施設の先生方が勉強会に参加され、
zoomの画面越しではありますが、一堂に顔を合わせました。
中には職員研修として参加する園もあったようです。

2021年1月30日(土)

- 9:00～ 受付開始
- 9:45～ オリエンテーション
- 10:00～ 講演
- 11:30～ Q&A



藤森平司 特別セミナー 「1年の振り返り」

新宿せいが子ども園 藤森 平司園長

—はじめに—

おはようございます。よろしくお願ひいたします。名簿を見たときに懐かしい方が多いので直接お会いしたいが、顔が観れて嬉しく思います。まず今回耳にタコができるくらい、コロナと聞いていると思いますが、地方の方は、東京を心配されると思いますが人の数は減らないですね。園のある高田馬場は、普段とあまり変わらないですし、インフルが流行っていない分、園児は全員出席している状況で、こんなに多くの人が居る中で、新宿区ではコロナになる人が30名位しか出ない、地方の人は、あちこちで倒れていると思うかもしれません、そうではないです。コロナに関して考えると二つ大きく考えることができます。コロナ禍において、子どもに何が大事かが見えてきたことです。自粛をしながら、どんなことが子どもに必要かが、一つ見えてきました。コロナが終わった後にどうなるかが早まっている。いろんなことが成り立たなくなっていることもあるが、オズボーンという人が、今ある仕事の半数以上はなくなるのではないかと言われています。10年先だったものが、ここ数年で起きてきていることもあります。必要な仕事は残っていくと言うことです。感染症という事もあり、ITや変わるもののは変わって来ます。時代的には、早かれ遅かれ来るという事です。将来どうなっていくかの見通しを立て、保育園、幼稚、園子ども園がどんな役割をしていかないの提案をしていかないといけない。

—自粛期間中における保育—

まずはコロナにおいて考えるのは自粛です。これは、私どもは研究という手法が無いので感覚しか思えないが、自粛期間、今緊急事態宣言が出ているが昨年はずいぶん子どもたちが休みました。毎日10何人でした。解除されて出て来た時に、慣らし保育と同じように4月当初に戻っていたことが多かったです。だんだん慣れるかと言うと、解除され半年たっても、子どもの様子が違う面があります。奇声を上げるや不安になるとか、東北大震災の後の症状と似ていて、何か不安がある。保護者とずっと家にいて、ユーチューブ漬けか、最初は親子で過ごせてよかったと言うが、子ども集団で過ごすことがストレスになったり、落ち着きがなくなることが増えています。人は、人同士繋がって生きていく生き物なのだと思います。顕著に出るのが乳児です。保育園は預かるのが当たり前のように思っていましたが、家に置いてみたら3歳児神話ではないが、家にいることがいいという事で、自粛期間は乳児は情緒が安定し、愛着関係が出来て、落ち着くと思ったら逆でした。乳児からある時間、子ども集団が必要なのではないかと感じました。きちんとした研究としての証明が出来ないので歯がゆいが、子どもの様子を見ると、乳児から子ども同士の繋がり、兄弟がいればまだいいが、大人とのことで過ごす子は、登園してきた後にどうもおかしい。社会スキルという事が低下してきている気がして、仕方ありません。今回、緊急事態宣言もでて、保護者にとって必要な施設だから開園をして、閉じないようにと言われていますけど、実は来月の私保連の保育通信では、埋橋先生がイギリスの状況を発信されます。イギリスでも開園していますが、子どもの育ちにとって必要だから開園しています。という事が書かれています。自粛期間でも開園しないといけないのは、働いている親がいる、医療従事者は働いているから開けないといけないではなく、子どもの育ちにとって、休園することは良くないという事があり言われていない気がします。そういうことを思って、保育園の役割はこうして見直すことが必要だと思います。これからコロナが終わってからも主張したいのは、保育施設、未満児の保育は、必要な子だけを預かっていますが、必要という感覚はどういうことかと言うと、働いていたり、家で見れないことを言うが、兄弟がいなかったり、子どもが少ない社会では必要な気

がします。私達は、家庭の代わりと言う考え方を捨てないといけないと思っています。乳児から教育必要である。その教育の内容は将来必要になる力、その中で社会的スキルが重要になると言われています。その基礎を乳児から、子ども集団で学んでいるという事で、社会的スキルは子ども同士の関わりの中で学ぶという事で、全ての子どもにとって、子ども集団に入れることが必要であると主張するべきだと思います。家庭の中でできるなら、来なくていいという事が含まれてしまいます。育休が増えていくことが最も良くなる、家庭に返せば子どもにとって幸せだろう、親の元に返すことが幸せだろうという論になってしまいますが、いい親であっても、子ども集団の中で育つことは出来ない時代になっています。最近、中国で講演することが多いが、中国では未満児の保育が広がっていません。おじいちゃん、おばあちゃんが見ているからですね。おばあちゃん、おじいちゃんが見るようになってしまいますが、乳児期の育ちがそれで保障できるかですね。それはなぜかと言うと、祖父母の時代は兄弟が5人から10人いたが、子ども同士の関わり、異年齢の関わりが豊富にありました。真似をしたり、競争して育ってきた。それが今は緩和されました。一人っ子政策で今は二人になった時に、子ども同士の異年齢の関わりが欠けてきている。コロナによって、子ども同士の関わりが分断され、子どもの様子がどうであるかを検証することは必要だろうと思います。自粛は経済的なことが論じられ、大人の鬱が論じられるが、子どもにとってどういう影響があったかを、もう少し検証しないといけないと思います。O E C Dは、生まれながらに教育をということを言っています。現在では、生きてからすぐにすべての子どもが教育される権利があると言われていますので、乳児からの教育はどうあるべきか、学校教育の教育とは違う意味です。大人の遊びと、子どもの遊びでは種類が違うように、教育も学校教育と乳児教育の「教育」の意味も随分違っています。私達は学校に惑わされないこと、乳児からの育ちを幼児に繋げていくことなのに、小学校の学習指導要領を下ろしてきたのが指針になっている。教育の三本柱にしても、学校教育における三本柱を引き継いでいる。習得から基礎に変えたにもかかわらず、内容は変わって来ていない。整合性をとることを優先しているからですが、小学校以降の教育ではなくて、乳幼児教育がどうあるべきかを考える必要があると思います。

—コロナ後の社会を見据え—

重要な観点は、コロナが終わった後にどういう時代になっていくか、子どもにどういう力が必要かと思います。東北 大震災の時もそうですが、今年度の保育は昨年度に立てた通りの年案を行っている園はないと思います。いつ何をするという計画を立てたときに、今年は実現できません。これはこれから時代はそういう意味では、確実ではない、不確実な時代になる時に、生きる力を子どもたちにつけていかないといけない。大人の言った通りに動く子どもでは、生きていけないとされています。コロナや地震が起きるか、これから予測がつきません。年案は、どのように子どもを動かすかと計画立てても、実現できると思っていないですね。そうではなくて、何が起きたときも必要な力をつけること、力の発揮の仕方は、その時代に合わせて発揮できるようにすることですね。指針の中でも、知識技能を得て、どう使うかが書かれていますが、どう使うかは時代が想定できない状況、見える状況でないといけないですね。乳児から何を目指すかを、もう一度見直さないといけないと思っています。私たちは、各部屋にゾーンを作つて、子どもが選択をしながら自分から遊ぶ。主体的遊びを試みてきましたが、密を避ける意味でも有効でした。一斉に同じことをすることは、これから難しくなります。感染症だけではなく、子どもの個々の力を活かす、これから予測できない時代においては、共同的に協力して、社会を作ることが求められる中に、それぞれの得意分野から自立していくので、一斉に同じ遊びをさせること、同じ知識を与えることは、子どもにとって必要だという人が多いですが、世の中に出たときは役に立ちません。自分で考え状況を判断し、行動できる子でないと無理ですね。私の子どもの頃の多子時代から少子時代になり、IT化の変化だけではなく、予測不可能な時代に対する考えていく力を付けな

いといけない。きちんとした発達を遂げるために、発達の定義をしますが、もう一度抑えると、発達をする中では、子どもたちがそれまでの経験の豊富さが、その後の子どもたちの発達に影響してきます。今日は何をして遊びましょうと 1 種類だけではなく、様々な経験をする環境を用意して、保育者はそれを提案して体験させていく。子どもたちは心情が生まれます。これは面白そうとか、どうなっているかと、心情が生まれると自分でやりたくなります。その時に、その環境が用意されていなければ実現できません。心情を持った後で、これをしたいと思うのは意欲です。それを実現するための環境が用意されていないといけないです。そのためにゾーンを作りますが、何を作るかは木工を作ればいいとか、名前で決めますが、子どもが心情を持ち意欲を持った時に、実現できるという事ですね。ウーバーベイツを町で見かけ、自分たちもやりたいと思ったら、箱を作れるようにしたり、カードの仕組みが面白いと思ったら、カードリーダーが作れるようなものを置いておいたり、経験したことを意欲を持って取り組める環境がゾーンですね。年案・週案を立てて、こんなことをしましょうと言うのは、発達には影響していかないですね。知識が増えてできるようになっても、将来には影響していません。経験を元に、心情・意欲・態度が生まれ、環境に自ら働きかけることで、新たな価値を子どもが見つけていく。それが習得なんですね。新たな価値を繋げていくことが習得であり、発達なんです。何かが出来ることが習得ではなくて、習得は子どもたちが新たな価値を見出すこと、新たなことを発見することが、習得です。

—これから求められること①—

このプロセスを経るためには、私たちが見直さないといけないのはアートの世界です。何故かと言うと、意欲とかを表現させようと心持ちを絵で表したり、制作で表すように、アートの世界に落とし込むことがこれまで中心でした。しかし、アートの世界では綺麗だねと言うが、それだけでは新たな価値が見出せません。アートが大事ではないのではなくて、これまで十分に取り組んできた中で、足りないことが STEM。科学的視点が足りないですね。先ほど言ったように、面白いと思った時にアートの世界だけではなく、どうしてだろうかとか、やってみたらどうかとか自分から取り組むことが STEM で、アートの世界から切り離すことだと思っているんですね。STEM と言うと、アートも入れるべき STEAM をトレンドのように言う人が多いが、保育はアートの世界に取り組み過ぎていて、科学的プロセスに落とし込むことが必要だろうと、アートをあえて抜いているんですね。例えば、子どもたちがブロックを作って組み立てる時に、子どもたちが現実的な作品を作りますね。その中で、どうしたら高く積めるか、バランスをとれるかこれが STEM です。先生たちの言葉掛けもどうしたら高く積めるだろうか、ここだと倒れちゃうねとかがテクノロジーだったり、エンジニアリングに繋がってくという事ですね。今言われているのが理系の時代になると言われているので、理数系の学力調査が行われているのは、それを見越していこうという事です。よく女性は苦手だという声を聴きますが、先月、算数理科の学力調査の結果が出ていました。小5と中2の比較で、シンガポールが全て 1 位でしたが、その裏に性別の比較も出ていました。日本では小5は女子の方が高く、中2では男子が高かったですが、イギリス、アメリカ、韓国は中2では女子の方が高かった。理数は脳の問題で、男子の方が得意と言われているが、女子の方が得意な子が多いということが分かっています。女子の方が科学が得意かもしれない。分析として、理数は男の子やるものだと、ジェンダーイメージがあるからだと言われていますけど、保育者の皆さんは子どもたちは、女の子も科学に興味を持っていると思った方がいいです。苦手意識を持つ人とは、化学式や学校でやる科学のイメージが強いですが科学は、ブロックをどうしたら高く積めるかとかです。うちの保育室に大きな石が飾ってあって、公園に遊びに行ったら落ちていて、それを掘ったら深く埋まっていて、そうしたら子どもが何か意味がある。ちょっとしか出でていないのは意味があると言って、園に飾ろうと言って持ってきた。ただ美しいという世界から、下にどれ

くらいあるのかとか、ここに意味があるかもしれないと思うことが、化石の発見につながる可能性があるように、こういうことを考えることが STEM です。科学実験だけではなく、不思議さとかです。私たちが、意味ないよ！ということが禁句なんですね。子どもにとって意味があること、そこに新しい発見があるかもしれない、まだまだ STEM を私も摑めていませんが、すべての中に STEM が入っていて、アートがあることも承知をしているが、編集者が来た時に、雲を見て、子どもが「うさぎさんに見えるね？」と言うのは科学でしょうか？STEM でしょうか？と聞かれましたが、私たちはこれまで、「うさぎさん可愛いね」で終わっていたことを、雲は何でできているのだろうかとか、やかんの湯気が雲みたいだねとか、そういう言葉かけを持って行く。ただ美しいと感じた心を絵に表したり、一緒に感動するだけではなく、一緒に深める言葉かけが STEM の活動です。

—これから求められること②—

からの時代必要になってくるという事で、小学校でプログラミングが始まります。文科省が検討しているのは、専科にしようと言っています。多くはプログラミングと言うと、キーボードでロボットを作るとか思いがちですが、そうではなくて、因果関係を知ることや、こうすればこうなるとかを知るとか、そこまでの道筋を考えることです。散歩へ行くときは、どこどこの公園に行きましょうという事を選ばせていたが、プログラミング教育では、公園に行く道順を考える。どの道を通れば公園につくとか、公園に行くまでに信号を通らないで行くにはどうしたらいいとか、信号がなかったら、店の前を通りながら、あそこに行くにはどうしたらいいかは、まさにプログラミングです。今後はそういう事を思考の中に入れるのが必要だろうと言われ、その基礎を子どもたちの中につけていくことが必要だと思います。政府がタブレットを一人1つと進めています。世界と比べ日本は遅れていて、タブレットを使うことが少ないので、自粛で家になった時に遅れた。ただ問題がいくつかあります。タブレットを取り入れていた先駆的な国々は、新聞にはペーパーに戻っているとありました。読んだり、進めていくにはタブレットだと読み飛ばしたり身にならない。ペーパーの方が身になると戻すとありました。デジタル教科書になろうとしていますが、どこまでするかを検討していますが、教科書は紙の方がいいと私は思います。タブレットでは、そのページしか見えない。私の孫の話だが1年生の男の子がいるが、私の妻と学校であやとりが流行っているという話になった。あやとりをどうしていいか分からぬと言ったので、妻があやとりの本を買ってあげるねと言ったら、もったいないと言ったそうです。もったいないと言っても、読まないとできないのではと言ったら、検索したら出ると言った。孫はタブレットすぐにユーチューブで探して、分かりやすいとかそういう会話です。小学校のアンケートで趣味に読書と書いていた。本を読むのは好きなんですね。本は紙で読む、検索や調べ事はタブレットを使っている。教科書は紙で、横にタブレットで分からぬこと深めたいことをタブレットで調べたらいいと思います。何でも使えばいいわけではないですね。私の園では5台タブレットを導入しています。久しぶりに会ってzoomで話せるのはメリットですね。自分の園の紹介や地域の紹介を子どもたちがやっています。大阪や長崎の子たちとしています。次にシンガポールの子たちとzoomで繋いだり、やり取りをしました。私の園は週1回そういう日がありますので、皆さんの中でもやりたいと連絡を頂けたら出来ます。これは思ってもみなかつた効果がいくつありました。一つは話している時に5,6人でわーと話したら収拾がつかない。子どもたちはそれを分かって、聞いている時はミュートにして、話すときはマイクにする。保育の中でじっと聞きなさいと言っているのが、zoomでやることで身に付いている。人の話をよく聞くようになりました。それから今宮崎の園とzoomをしました。その時、保護者のお便りを見せて頂いた。その保護者が自分の子は、東京の子とzoomでのやり取りを楽しみにしています。東京の子は皆、英語話せるんだよと言ったらしく、東京の子は皆、黒いの？と聞いてきた。実際に話していないと何かで知ったイメージで、皆英語で話している

と思ったりする。Zoom をした日に、東京も普通の子で、日本語を話していたと意味があります。しかし、ズームでは新しいことを生み出すのは無理です。一方的に話を聞くことは出来ますが、議論してアイデアを出すのは無理ですね。社会的スキルは、人が合わないとだめ、zoom を使って試みているのがアプリで、ゲームで遊ぶことが多くなってしまうが、タブレットで写真を撮って、アニメーションを作っています。パラパラ漫画が出来るんですけど、人の姿をワンショットずつ取ってアニメーションを作っています。人が出来ることを何もタブレットですることはないです。それで出来ないことを、タブレットを使っていくことなので、これから何が出来るかを考えないといけないですが面白いですし、子どもはあっという間に使いこなします。こういうことが、これからの時代必要になってくると思います。コロナを経て、いろいろと考えました。

—学びの時間—

STEMなんですが、週に一度実験の日があります。これは学びの日と言って、グループごとに実験をし、面白いと思ったことをやれるように用意しているのが STEM ゾーン。まず先生が見せないと何をしていいのか分からぬので、まず見せます。見学者が、スポットを使っているのを見て、上手ですねと言っていましたが、昨年 3 月、自粛期間になった時に、家でも保育をしていこうと週案を立てながら、何をテーマにする中で科学をするときに、各家庭にスポットとコーヒーフィルターのキットを送って、にじみ絵を作るとかをやった。園でも実験を始めるので、家で練習をして下さいと出したら、園でやる時にとても上手だった。自粛期間中も私どもは 3 月から毎週キットを送って保育をしていました。出前保育と言っていましたが、YouTube 潰けになるだろうと予想して、家でもやっていたが唯一出来ないのは、子ども集団が出来なかった。5 月は鯉のぼりのキットを送って、鯉のぼりを作って写真を園に送ってもらい、大きな鯉のぼりを作り子ども同士がつながっていると体験させたが、いくらキットを送っても、子ども同士の関わりは家では出来なかった。私達が必要なことだと思いました。コロナの中で STEM を何故考えたか、ある意味では今までの中では足りない、これから必要であることだと考えたこと。ゾーンの意味、何でゾーンを作るのかの意味を含めて、改めて私たちに進もうとしている方向は間違っていなかったと思います。これからの時代はそうなるといち早く、私のこういう保育をシンガポールや中国は学力が高く、改革を行っている国が就学前の教育がつながると学ぼうとしています。これからの時代は、これからやろうとしていることが先駆的です。特殊な保育で園児を集めるとか、有名になるためではなく、スタンダードにしていくことを皆さんと力を合わせてやっていけたらと思っています。

—参加者の皆様からの質問—

森口：皆様から質問を頂いていますので答えて頂きたいと思います。保護者からの質問が多く見受けられています。

保護者とのコミュニケーションについてどう取ったらいいでしょうか？見守る保育の観点からどう考えていいですか？

藤森：保護者は難しいのは人は色々な考え方があります。コロナは平気という人もいますし、非常に恐れる人もいます。すべての人に納得してもらうのは難しいことだと思います。しかし園がどう考えているかを知ってもらう。合っているかどうかは仕方ないですが、園が何を考えているかを知ってもらう。常に子どもを中心に考えていることを知ってもらう事です。私の園も第三者評価を受けて、この園を開園して 14 年。ある意味では保護者がこの園のやり方を理解してきた。マスクをしているかどうかも保護者として不満かもしれないけど、考えてこうし

ているんだと理解してくれているアンケートが多かった。親からの要求もあります。園は全てを聞くことは出来ません。園が考えていることを伝えることなので、ブレないこと。それからきちんとした研究を私たちは知っておくことが必要です。様々な研究によって違いもありますけど、国の方針を抑えることが重要だと思います。うちでは私が見守る保育と言つていませんが、保護者が広げようと意味を理解してくれています。来週、土曜日に毎年行っている卒園した後にどういう事が活かされているか、地域に広げたいことを卒園した親が集まって、活動している集まりがあります。今年は見守るの「守る」とは何かをテーマにしています。見ると守ることがあるが、どうも見ることが議論され、手を出さなければいいと言われるが、守ることもある。見方を考えるよりも守り方を考える。そのためによく子どもを見ないといけない。見ているだけと言うのはおかしな話ですね。どういう事が守ることかの話し合いの計画をしています。保護者には、私の園がどんなことを考えて、どんな方法を考えているかを反対する人が居ても見えてきます。もう一つはストレスが溜まっていたり、色々な社会の問題が多い中で、サンドバックになることが多い。むきになって立ち向かったり、言い訳をするのではなく、社会の中できつい中で気を張っているので、園に対して構えていってしまうことが多いが受け止めることも大事です。言ってくる言葉尻でショックになって反発するのではなくて、何で言ってくるのかがある。保護者が勝手なことを言うのは、そういう時代で、周りの人が理解する人が少ないのかもしれない。子どもだけではなく、保護者を育てないといけない世の中な気がします。保護者にとっても、愛着存在であるような存在でいてあげて欲しいと思います。それは役割があって若い職員がするのは難しいので、園にはいろいろな年齢の人が必要なので、ベテランがそれを聴く態度を持たないといけないと思います。歳をとって、意見を押し通す人もいますが、年を取ることで、人の話を聽けることが経験だと思っていますので、園の中で受け止めてあげて欲しいなと思います。そうするとだんだん折れてくると思います。筋を通す所だけは変えない。常に子どものためにという事をしていくことしかないように思います。

森口：新人職員に対しての育て方でいくつか質問がありましたが、いかがでしょうか。

藤森：若手の前に、コロナの間に考えた1つに、保育者になろうとする人が少ないのでなぜだろうか。この時代になり、いろいろな意味で保育者はいい仕事だと思っていますし、これからも必要な仕事なのに、なり手がいないのが不思議ですね。待遇もいいわけではなくて高くはないが、それ以上にいいところもあるにしても、足りないとわれます。これはちょっと考えないといけないと思います。若い人に対しての考え方も影響すると思います。今ブログに書いていますが、教育改革の中で教員の質が問題で、どれだけの人が目指そうとするか。私は給料よりも、保育者と言う社会的地位が低すぎる気がするんですね。保育者は大きな声で言えない職業、特に男性。そうではなくて教員も言われます。保育者の希望が多い職業になって欲しいと思います。そのためにはどこがいけないか、一つは古い考えを押し付けることがあるかもしれない。若い人とギャップがあるので、私もえっと思う事や、腹を立てることもあるが、本人が悪気で言っているかと言うとそうではない、子どもが詩人であると。例えば、おひさまが目を覚ましたと言うと詩人と思うが、こんなこと言ってと言うのは、若い人も知らないからかもしれない。私達もえっと思うことがあるが、そうでないかもしれない。時代的なギャップは常にがあるので、若い人にもある。子どもと同じように何を言いたくて行動したのか、もし悪気があったらちゃんと言わないといけないです。保育者が足りなくても、虐待をしたりする人にはなって欲しくないと思っています。いい人に保育者、なりたいという人に目指して欲しいと思いますし、魅力あるものにしていかないといけない。ある意味細かいことを気にするよりも、大筋を抑えて伝えていく。時代もあって私の園でも研修で差別用語について若い人は意識していない分だけ、保護者で気にする人が居る。差別用語は国に対してよく行われていたが最近はLGBT、

障がいに対して言葉を気を付けないといけない。私の園でもそういうことがあると、園内研修など注意するのは悪気なく、知らないだけと思って話をするが、私も自分もハッとしたのが、保育者の中で恋人が出来た、どんな彼なの？と男性とは限らない。そんなことを思いもせぬ言ってしまうが、そういうこととか、LGBTもちゃんと理解しないといけない。年配は若い人から学ぶことが多いです。私達は新人から学ぶことを積極的にすると、新人も私達から学ぼうとします。そう言う態度を見せることで、若い人も逆に年配から学ぶこともあるねとお互いの存在を認め合うことが大切だと思っています。違うことに出会うと戸惑うこともあります、理解し合うことです。子どもを大切にしましょうだけだと、それに大切な仕方が違いますので、具体的なものを残しておこうと方針を替えました。理念とかに立ち返ることです。私が望むことは保育をしたい人、子どもが好きな人に保育者になって欲しい。保育者の希望者を増やしたいと思っています。

森口：次の質問です、STEM の保育事例を教えてください。

藤森：来年の担任発表をしましたが、新しい時代という事で学びの担当者を決めました STEM の担当は森口先生、異文化については中山先生に決めました。これからの時代、これが必要だろうと決めました。誕生会で森口先生がことごとく実験に失敗しました。実験は9割失敗という事を知ることです。子どもにとっては結果を知らないから失敗にならないです。大人が持っている結論を持って行くことではなく、子どもが不思議だと思うことだと思います。では森口君から事例の紹介をお願いします。

森口：実験を毎週1回やっているのですが、派手なことをするのではなく、身近な不思議に気付いて欲しいと思っていて、ペットボトルに光を当てて、輪っかが出来て楽しんだり、子どもがこうやってみたいとか、石鹼入れたらどうなるかな？とか、やってみようとやって見ると、ぼやけるので屈折して見えるので、予想している以上のことをする。子どもが思いつくことをやって欲しいと思いますし、一緒になって楽しんだり盛り上がったりする実践を重ねていますし、次に STEM ゾーンを作ります。

藤森：紙コップを横にしてのせるとつぶれるけど、板を敷いて立てるとなつぶれないとか、説明は出来ないですが、凄いという感動。子どもが理由を知りたかったら分かったら教えてと言えばいいと思います。

森口：次の質問です、保育における SDGs を聞きたいとのことです、いかがでしょうか。

藤森：取り組みというよりも、保育園の生活にその観点を持つかだと思います。何かを買うにしても、取り入れるにしても、捨てるにしても、その観点を持つことだと思います。園の内装も使う場合には、日本の文化は耐用年数と材料の成育年数とくらべて、床に使う畳や障子を毎年張り替えるとしたら1年草を使うとか、柱も50年で変えるとしたら、それくらいのものを使い、子どもたちは牛乳パックでストローを飲む時に、ストローと紙パックは別に捨てるようにしています。これから食品ロスもあるので、近くのレストランを含めて安全な食。これから進めていきたい一つだが、遺伝子組み換えの小麦を使うと発がん性がある。アメリカでは禁止されているが、日本では使えるとか、国産がいいと言っても、種苗法と言う種を外国の物を使ってしまうことがある。種の周りに農薬がコーディングされているので日本で育てても、国産と言っても農薬が入っている。ドイツで学んだことだが、急速冷凍を使っていて、安全な食を急速冷凍にして給食に使えないか。自然栽培は天気に左右されるが、多く取れたときは冷凍をして安定した供給できるようにと送って給食とかロスをなくす。中国は私たちのイメージと違うが、中国でも学校給食では自然栽培のものが使われています。特に残す文化ですが、中国ではそれをやめて食べきることに変わって来ています。生活の中にヒントがありますので、運動論でやらなくても、先生たちが意識をもって、そのためには園内研修からの積み重ねだと思っています。そう言う姿を見せていくことだと思います

います。異文化は異文化ゾーンがあり、異文化なので、日本の文化のけん玉やめんこがあるが、アジアの遊び道具、絵本も日本と外国語で書かれたものを展示してあります。韓国語や中国語、英語とある。中山先生が担当するのは学びの時間で、そのゾーンで英語だけで会話するとか、外国の本をその国の言葉で読み聞かせをするとか、語学として体験する。世界地図は日本が端っこにある地図を貼っています。語学と言うよりも、他の文化を知ろう、ごっこゾーンも衣装の中に職業の違う服、工事服や韓国やシンガポールの衣装が置いてあります。まずは文化を知ろうと週1度、そういう体験グループごとに遣るので日を決めています。

森口：保育をする上でマスクの着用についての質問です。

藤森：色々な議論があって、ある先生が目から判断するから大丈夫とか、目で伝えるとあるが、私はその意見は反対で目からは表情は伝わらないと思っています。赤ちゃんは目を注視することは確かです。視線を見るなどを判断します。そのために白目があります。獲物を狙っているかを見るため、先生の目を見ることは確かです。その次に、誰に向かってみているかは、どんな表情かは私は顔で見ると思っています。マスクをしている女性の表情を見て、どんな表情をしているか聞くと、ほとんどが怖いとか、睨みつけていると言ったが、心配している思いやりの目つきだと言うんですね。目では分かりにくいのは、お化粧をしてしまう。目をお化粧してしまうので伝わらないので、目では伝えにくいので、マスクをしているのなら表情、ボディーランゲージではないが、普通以上に大きくするとか、目でも大きくするとかしないといけない。但し私の園では子どもと関わる上ではマスクはしていません。イギリスでも、子どものとの関係ではしていないとあります。但し親のお迎えの時はそのようで、私の園でも職員同士会議をするときはしています。先生がちょっとでも具合が悪いと休んでもらいます。園も休みやすくする。マスクしていない分神経質です。ちょっとでも体調が悪かったら帰させますし、メリハリをつける。どこはするか、しないかです。保護者のお迎えでは張り紙がしてあって10分以内に帰って下さい。濃厚接触者は喚起のない中で対応した時とあるので、換気をしマスクをすること、10分以内という事にしています。その辺りは心配する親は言ってきますが、多くは感謝する話を聽きます。子どものために外しているんですね、と保護者が言ってくれています。マスクをしてもその場合でも、表情を大きくしないと伝わらないと思います。ちゃんと意識して大げさな表情をしないといけないと思っています。

森口：藤森先生は様々なアイデアをどうやって発想をされているのか、情報や時代の流れを讀んでいるのですか。

藤森：いくつかあるのですが、私は本も読めないことがあります。有難いのは妻が本を読んで、付箋を貼ってくれてここだけ読んだらいいと渡してくれることが多い。妻はメモ魔なので、重要だとメモったり、こういう人がこういったとかある。私は、コロナの時に自粛中も朝会をしていたが、私の役割は正確な情報を新聞や色々なことを知ることだと思っているので、朝会でレクチャーしていました。職員も読みなさいではなく、職員と私の関係も大事なことは私が読んで伝えるから、情報が出たことを外国ではこうだとか伝えていました。皆さんにも役割があるので、自分で言うのも変なのですが、私のブログを読んでもらうことですかね。どんな教育改革が行われているか今ブログで紹介しています。読み飛ばしてしまうこともあるが、ブログに書くと丹念に読むので、現在やっているのが小学校以降の改革の本をブログで紹介しています。その前はキャシーという人が子どもが成功するために、乳幼児教育はどうあるべきかという事を紹介しています。ブログを読めば時間も取ませんので、そういうことをしていくと良いと思います。すべてが全て同じように本を読む必要はないと思いますので、実践していくようにして、自分はどこが出来るかを分かり合い、助け合うことが共同だと思っています。自分の役割は何なのか、地元も広げることも役割だと思っています。

森口：給食で使っているアクリルケースについての質問です。

藤森：コロナになった時に子どもたちが配膳することを議論した時に、子どもが言って両をよそうことは意味があるので残したい。注文してよそるために最初はビニールシートを下ろそうかと話したが、職員の中からコロナの時だけではなく、今後できる対応をしていこうと模索する中で、アクリルケースで給食を覆って唾が飛ばないようしている。もともとはショーケースなので、合羽橋へ行って買ったものです。その頃はそんな風な発想はなかったので、いっぱい売っていた。ネットでもあると思うが、食品の展示ショーケースのカバーです。アクリルで箱は作れます。2面空いていれば下にお皿を被せられればいいので、接着剤を付ければできないことはないです。東京に来ることがあれば合羽橋でも買えると思います。

—おわりに—

皆さんにお会いできて良かったですが、訪ねられたらいいと思います。しばらくは続くと思いますので、環境セミナーも考えています。もう一つは中国や他の所でも講演を頼まれる中で、私だけが行くのではなくて、皆さんの中で、交代で行ってもらえたたらと思っています。そういうセミナーを組んでいきたいと思っています。ラーニングピラミッドと言って定着率があります。話を聞くとか、資料とかを見るは、これまでの学校教育でした。一番定着することが人に教えることです。皆さんが定着させたいと思ったら、誰かに教えること。教えるようにするセミナーを開こうとすることです。教えることの次は自ら体験することです。今回のコロナでいろいろなところでセミナーをやったり、講演をする中で、聞いた中でやってみようとならないと定着していかない。聞いてそうだなと思っても、次の行動に移せないとあまり意味がなくなってしまいます。そうだ、そうだと言っているだけでは進んでいません。現場を持っていますので、現場から発信をして、行動をして子どもにとってどういう意味があるのか、保育園・幼稚園・子ども園、特に乳児から必要になる時代が来ると思っています。このメンバーは、幼稚園は少ないですが、幼稚園に子ども園になってもらい、乳児から取り組んでもらいたいと思います。今の園のように10時間もいることは子どもにとっては良くないと思っています、しかし24時間ずっと家にいることがいいと思っていません。子ども集団の中で、体験することを全ての乳幼児施設はどんな形態だろうが、協力してこの時代に必要なことは何かを訴えていきたいと思っています。今年もよろしくお願いします、直接お会いできるのを楽しみにしています。ありがとうございました。

本稿は、2021年1月30日に行われた「藤森平司 特別セミナー」の講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒101-0051

東京都千代田区神田神保町1-1-17 東京堂神保町第3ビルディング8階

Tel:050-1744-8823

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。